

# オーケストラ公演の再開に向けて ～ ディスカッションとデモ演奏 ～

公演実施にあたっての措置・課題・対策



© 飯島隆

令和2年6月19日

兵庫県立芸術文化センター

# 目次

1. 公演概要 .....	p.2
2. 公演実施にあたっての措置・課題・対策 .....	p.3
エントランス・ホワイエ .....	p.3
客席 .....	p.6
ステージ・舞台袖（仕込み・バラシ） .....	p.7
ステージ・舞台袖（リハーサル・本番） .....	p.7
楽屋 .....	p.12
公演全体にかかる課題 .....	p.13
3. 参考資料 .....	p.14

※本レポート記載の措置・対策は6月19日時点のものであり、  
その後の公演では、状況に応じて随時修正・変更しています。





## 2. 公演実施にあたっての措置・課題・対策

### ▶ エントランス・ホワイエ

#### 措置

開場までに、来場者が頻繁に触れる手すりやエレベーターボタン等の消毒、身体的距離の確保やマスク着用等を促すポスターの掲示、距離を示す床設置シートの配置、複数箇所への手指消毒液の設置等を行った。来場者に対面で応接するレセプションист等のスタッフはマスク・フェイスシールド・手袋を着用し、その他のスタッフはマスク着用を徹底した（写真1,2）。

開場時間は、通常は開演の45分前であるが、分散入場を促進するため60分前に早めた。

来場者は一列になるよう誘導し、エントランス前で手指消毒をしてもらい、同時にサーモグラフィーでの皮膚温度の測定を行った（写真1, 2）。37.5℃以上を検知した場合は非接触型体温計で改めて体温を測定し、その結果も37.5℃以上であればご帰宅いただく予定としていたが、結果的に37.5℃以上の検知はなかった。手指消毒と検温を待つために数名の列ができることはあったものの、長い列ができることはなく、流れはスムーズであった。

その後「観覧」（文化施設・音楽団体関係者）と「取材」（報道関係者）の2ルートに分けて場内に誘導。エントランスでは座席位置を指定した出席票（事前に送付）をレセプションистが目視で確認した（終演後に回収）。チラシ等の配付物はラックに設置し、来場者自身で取ることにした（写真3）。

舞台・楽屋エリアとホワイエ・客席エリアの行き来の制限を徹底し、来場者による出演者への面会希望は全て断った。終演後の出演者によるサイン会はなしとした（当面行わない予定）。

クロークは閉鎖し、コインロッカーのみ利用可能とした。喫煙室は閉鎖（写真4）、ウォータークーラーは使用停止とした。トイレには待機位置を示すテープを貼り（写真5）、エレベーターは4人までに制限した（写真6）。



写真1



写真2

## 2. 公演実施にあたっての措置・課題・対策



写真3



写真4



写真5



写真6

写真提供：飯島隆

## 2. 公演実施にあたっての措置・課題・対策

### 課題と対策

#### ▶ ホワイエの混雑

入場時は適度に分散していたが、入場後、ホワイエにて知人を待ったり、来場者同士で挨拶や情報交換を行う場面が見られ、マスクで声がかもるために話す距離が近くなることから、密集・密接状態が発生した（写真7）。また、終演直後にも一時的に密集・密接状態が発生した（写真8）。

距離の確保について記載したパネルをスタッフが持って巡回したところ、解消した。



写真7



写真8

#### ▶ 床設置シート

エントランス前の手指消毒と検温を行うブースの前の床に、来場者間の身体的距離を確保するため「間隔をあけてお並び下さい」と足跡マークを表示したシートを設置したが、一部浮いている部分があり、蹴飛ばす、つまずく、ヒールがひっかかるといった来場者が見られた（写真1）。

公演によって配置を変える必要も予想されることから、テープなどで固定するのではなく、ポールを立てて間隔を表示する方式を検討している。

#### ▶ 配付物

チラシラックの配付物は気づかれにくく、また取りづらいために滞留が発生することがあった。次回公演以降は机上への平置きを検討している。

#### ▶ 熱中症予防

スタッフは終演までの長時間にわたってマスク・フェイスシールド・手袋を装用することになる。そのため、熱中症の予防対策が必要と思われる。

#### ▶ 掲示物

今回は問題なかったが、通常の公演では一般の来場者が自席を探すために座席表周辺が混雑することが予想される。

そのため、今後の公演では座席表の掲示箇所を増やす等の対策が必要と思われる。

## 2. 公演実施にあたっての措置・課題・対策

### ▶ 客席

#### 措置

客席は全席指定で、1階席前方と2階席前方を取材席、1階席後方を観覧席とし、両側2席を空け、前後が重ならない形で配席した（写真9）。

客席内に配置のレセプションはマスク・フェイスシールド・手袋を着用した。

通常のカゲアナ録音には入っていない新型コロナウイルス感染予防に関する案内（ブラボーを控えていただく等）は、スタッフが舞台上からマイクによりアナウンスした（写真10）。

#### 課題と対策

##### ▶ アナウンス

舞台上からのアナウンスは、客席のざわつきの中で来場者に届きにくかった。

どの範囲の注意事項までアナウンスに含めるのか、その内容の精査とともに、新型コロナウイルス対策の長期化を見据えたカゲアナの新規録音等の検討が必要と思われる。

##### ▶ フェイスシールドの反射

客席内のレセプションが着用しているフェイスシールドで照明による反射があり、公演中、来場者への影響が懸念された。

公演中に接客しない時（扉横での待機）はフェイスシールドを外す、新規購入する場合に反射防止フェイスシールドを導入するなどの対応が必要と思われる。



写真9



写真10

## 2. 公演実施にあたっての措置・課題・対策

### ➤ ステージ・舞台袖（仕込み・バラシ）

#### 措置

舞台スタッフは必ず楽屋口で手指消毒とサーモグラフィーによる検温を受けてから入館した。37.5℃以上を検知した場合は非接触型体温計で改めて体温を測定し、その結果も37.5℃以上であれば入館させないこととした（該当者なし）。館内ではマスクや手袋の着用を徹底した。

作業時の密集を避けるため、作業は余裕を持ったスケジュールで行った（リハーサル前日に仕込み、本番翌日にバラシ）。

楽器ケース等を置くために舞台袖に設置している机は数を増やして1台につき2名までに制限するとともに、間隔を大きくとった（写真11）。

弦楽器奏者は1.5mの間隔をとり、譜面台は1人1台とした（写真12, 13, 15）。指揮者と弦楽器奏者最前列の間は2mの間隔をとった（写真13）。弦が切れた場合の奏者間の楽器交換は中止とした。

管楽器奏者は2mの間隔をとり、飛沫防止のためL字型の亚克力パーテーション（高さ約1.8m）を各奏者間に設置した（写真14, 15, 図1）。演奏終了後には、パーテーション、譜面台、椅子の消毒作業を行った。

リハーサル開始前に舞台袖にも消毒液を設置し、舞台スタッフや出演者の積極的な手指消毒を促した（写真16）。

### ➤ ステージ・舞台袖（リハーサル・本番）

#### 措置

管楽器奏者には楽器内部の結露水の処理のため、段ボール箱に吸水シートを敷いたものを支給した。組み立てから指定場所への廃棄まで演奏者本人に対応してもらった。

演奏に必要なものは原則として奏者自身で管理し、共用しない、他者が触れないこととした（打楽器のマレット等）。楽譜についても各奏者でステージへ持ち込むこととした。

管楽器奏者以外は演奏中もマスクを着用することとした。

従来、演奏後に指揮者やソリストに舞台袖で手渡ししていた水やタオルについては、テーブルに置いて自身で取ってもらうこととした。

演奏後には、楽団・舞台スタッフが備品（譜面台、椅子、机等）の消毒を行った。

## 2. 公演実施にあたっての措置・課題・対策



写真11



写真12



写真13



写真14



写真15

## 2. 公演実施にあたっての措置・課題・対策

### 課題と対策

#### ▶ 作業での密集

作業によっては複数人が集まる必要があり、密集が避けられない状況が生まれた。また、マスクを付けている状態では指示が聞き取りづらい場面があった。

作業スケジュールの調整により作業時間を短縮する、フェイスシールドを着用する等の対策が考えられる。

#### ▶ 照明の照り返し

通常と異なり広い間隔をとった舞台配置であったため、照明による思わぬ照り返しが発生した。蹴込の色が通常より明るいという意見もあった。

今後は、蹴込を布地にするなど備品の交換を検討したり、照明仕込み作業時にこのような現象を想定した調整を行う。

#### ▶ 舞台袖の密集

開演が近づくにつれ、舞台対応や出演者対応のため、下手袖の舞台監督卓付近に多くのスタッフが集中し、密集状態になっていた。

役割を明確にして待機するスタッフを限定し、必要な場合は意識的に分散することが必要と思われる。

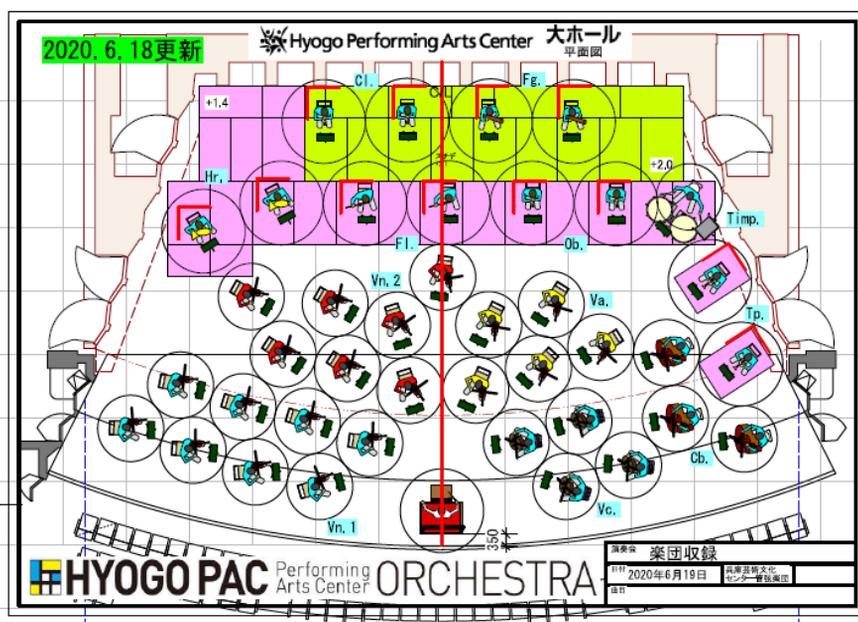


図1

## 2. 公演実施にあたっての措置・課題・対策

### 課題と対策

#### ▶ 手指消毒・備品消毒

備品の消毒作業については多くの課題が出た。

舞台袖に消毒液を設置したのがリハーサル開始前だったため、仕込み作業時の手指消毒ができなかった。照明・音響諸室で舞台機器を操作する際の手指消毒や機器自体の消毒も不十分であった。

仕込み作業の開始前に、舞台袖や諸室への消毒液の設置が必要であった。

個人に貸し出して使う機材（マイク・インカム等のマイクカバー）の消毒対策が不十分であった。

このことについては、除菌滅菌ケースの導入や予備を確保してのローテーション体制の構築などが必要と考えられる。

消毒液の設置数や布巾の数が増えたことで、回収後の個数が合わないことがあった。複数人で備品の片づけを行った際、消毒済みの備品とそうでないものが混在してしまい、全てやり直さなければならないことがあった。通常業務に加えて消毒作業を行うことから、業務時間が増加した（一例として、管楽器奏者用パーテーションの消毒は3名で20分程度を要した）。

これらの課題に対しては、消毒・衛生管理の責任者（組織全体の責任者と現場の責任者）を定め、消毒関係備品の把握、消毒状況の把握、消毒作業の適切な分担・効率化を図る必要があると考えられる。

演奏者が楽器ケースや荷物を置いたまま離席し、消毒作業が行えない場面があった。

演奏者に対しても、演奏が終わったら楽器やケースを速やかに片づけてもらう、可能な部分は自ら消毒してもらう（その場合、個人差を減らすため、事前に消毒方法のレクチャーが必要となる）等、協力を求める必要がある。

貸館の場合は、主催者に清拭消毒等の作業、協力を求める必要がある。



写真16

## 2. 公演実施にあたっての措置・課題・対策

### 課題と対策

#### ▶ 演奏者のマスク着用

当初、管楽器奏者以外の指揮者、弦楽器奏者、打楽器奏者については演奏中も常にマスク着用としていたが、リハーサルの時点で、演奏・表現上支障があるという意見が演奏者から出された。

そのため、演奏中は常に前方を向いており、会話はしないことから、マスク着用は任意とし、最終的に公演中は演奏者全員がマスクを外して演奏した。公演途中、演奏者がマイクを通じて所感を述べる場面があったが、その際はマスクを着用して発言した。

一方、演奏直前の舞台袖での待機中、マスクを外した状態で、近い距離で小声で会話する演奏者が見られた。

マスク非着用時は会話をしない等の周知徹底が必要であった。

また、演奏者や、後日公演の様子を確認した医師より、リハーサル及び本番時の指揮者からの飛沫の弦楽器奏者最前列への影響が懸念された。

指揮者のみはマスク着用を徹底する、または指揮者をパーテーションで囲む等の対応が必要と思われる。

#### ▶ 管楽器の結露水处理

管楽器の結露水は吸水シートを敷いた段ボール箱に処理するようにしていたが、わずかながら舞台上に飛んでいるものがあつた。

演奏後、拭き取って消毒した。

一部の楽器では、演奏中にキーの間の結露水を吹き飛ばすことがある。

医師への聞き取りと演奏者との協議の結果、今後はクリーニングペーパーやスワブで拭き取ることを原則としつつ、やむを得ず吹き飛ばす場合はウェットシートをあてがって行うこととした。

#### ▶ 演奏への影響

実際に演奏した感想として、「距離をとったことで、パート内の音を混ぜることに不安がある」（ヴァイオリン奏者）、「横の音はよく聴こえるが後ろが聴こえない」（チェロ奏者）、「隣の奏者の音や息遣いがまったく聴こえず、今まで以上に視覚に重点を置いたアンサンブルになる」（フルート奏者）、「今回もリハーサルで楽器の配置が変わったが配置によって聴こえ方が改善できる可能性がある」（トランペット奏者）といったことが聞かれた。

管楽器に関しては、飛沫は基本的に前に飛ぶので、パーテーションを設置するのであれば横の間隔を詰めても良いのではないかという意見が聞かれた。今後、専門家の意見も踏まえて検討する。

## 2. 公演実施にあたっての措置・課題・対策

### ▶ 楽屋

#### 措置

演奏者には事前に芸術文化センター独自の新型コロナウイルス対策のガイドラインを送付して対策への協力を要請し、入館時は必ず楽屋口で手指消毒とサーモグラフィーによる検温を受けてもらった。37.5℃以上を検知した場合は非接触型体温計で改めて体温を測定し、その結果も37.5℃以上であれば入館させないこととした（該当者なし）。館内ではマスク着用の徹底を依頼した。

随所に消毒液を設置し、身体的距離を取るよう掲示物で示したほか、ラウンジ設置の椅子やテーブルの位置を調整して対面での会話を避けるよう配慮した（写真16, 17, 18, 19）。

楽屋は定員の半数のみの利用とし、原則として扉を開放して換気の促進を図った。

演奏者のケータリングについては、ペットボトルの水の提供程度に留め、共用となるポットやコーヒーサーバーの提供は取りやめた。

#### 課題と対策

##### ▶ 密集状態の発生

下手側にある指揮者用楽屋の周辺では、対応や打ち合わせに備えるスタッフが多く集まることとなった。出演者向けの掲示物が同エリアに集中しているため、出演者同士の談笑も多く見られた。リハーサル初日は緊張感があったが、2日目以降は緩みが出てきた。

待機するスタッフの限定・分散、掲示物を複数箇所に出す等の対策が考えられる。



写真17



写真18



写真19



写真20

## 2. 公演実施にあたっての措置・課題・対策

### ▶ 公演全体にかかる課題

#### 課題と対策

##### ▶ 入館方法の徹底

通常時であれば、楽器、機材、印刷物等の搬入のために搬入口から入館する外部スタッフがいるが、検温と手指消毒の徹底のため、必ず楽屋口から入館することを周知徹底することが必要となっている（関係者用のサーモグラフィーは楽屋口と地下駐車場入口のみに設置されている）。

また、出演者・施設運営スタッフへの感染拡大予防の考えから、舞台・楽屋エリアとホワイエ・客席エリアの行き来の制限の徹底を主催者や来場者に広く周知することが必要となっている。

##### ▶ 一般来場者を迎えた場合の課題

今回の公演は事前申し込みのあった少数の関係者のみであったが、今後、より多くの一般来場者を迎えた場合は新たな課題が予想される（チケット購入者と来場者が異なる場合の連絡先の把握、トイレの待機列、面会・差し入れ希望等）。

来場者情報の把握については、7月10日から運用が始まる兵庫県新型コロナ追跡システムを導入する予定である。

##### ▶ ライブ配信のトラブル

Facebookでのライブ配信中、サービス側の自動認識で著作権侵害とみなされ、一時音声途切れた。今回実際に実施したように、複数媒体での配信によるバックアップ体制の確保が重要と考えられる。なお、ライブ配信中は、Twitterでの視聴者がもっとも多かった。

## 3. 参考資料

### メディア掲載

- 神戸新聞 6月20日（土）  
「オーケストラ公演再開へ 兵庫芸術文化センター管弦楽団がデモ演奏しライブ配信」  
<https://www.kobe-np.co.jp/news/sougou/202006/0013438554.shtml>
- MBS ミント！ 6月24日（水）  
「佐渡裕氏が思う"コロナ時代のオーケストラ"「一緒に音楽が出来る喜び」と「一緒に音を合わせる難しさ」... 最善の音を求めて」  
<https://www.mbs.jp/mint/news/2020/06/26/077659.shtml>
- 毎日新聞 6月24日（水）  
「新型コロナ 音楽生む喜びへ一歩 兵庫芸文センター 奏者に距離、デモ演奏会」  
<https://mainichi.jp/articles/20200624/ddf/012/040/007000c>
- 産経新聞 6月30日（火）  
「ソーシャルディスタンスの正解とは オーケストラの苦悩」  
<https://www.sankei.com/west/news/200630/wst2006300006-n1.html>
- 朝日ファミリーデジタル 7月7日（火）  
「この時期になぜオーケストラの音楽を発信するのか？ HPAC 佐渡裕芸術監督・広響 下野竜也音楽総監督 大いに語る」  
<https://www.asahi-family.com/column/pac/24641>

## お問い合わせ



センター全体の管理運営について TEL: 0798-68-0223 (代表)  
楽団の運営や公演内容について TEL: 0798-68-0203 (楽団部)



[pafh@gcenter-hyogo.jp](mailto:pafh@gcenter-hyogo.jp)



<http://www1.gcenter-hyogo.jp/>

